

二 ある機械工の職業的生涯

——畠山幸次郎氏の場合

シリーズのはじめに

いま、工場では、技術革新の波がおしよせている。マイクロ・エレクトロニクスの進歩で、おそらく、無人の工場も、ここ数年のうちに出現するにちがいない。戦後四〇年をみても、工場の設備は変わり、労働の態様も一変した。

例えば、新鋭の半導体工場などは、トランジスタからIC、さらにLSIと製品そのものが変わり、そこではたらく設備とともに、労働力の構成も、数年のうちに一変してしまった。防塵・防湿の硝子張りの工場のなかで、白衣ではたらく労働者の姿をみると、工場というより、それは、病院のような外観を呈している。一方、機械工場には旋盤やボール盤など昔と変

わらぬ工作機械が並んでいるが、ここでもNC、MC機器が入ってきており、熟練技能というものも変わりつつある。

しかし、新しい技術も長年蓄積された労働者のすばらしい技能の基礎のうえで威力を発揮しているのである。

ここに紹介するのは、昭和のはじめから、日支事変、太平洋戦争と戦後の混乱期、さらには、高度経済成長の時期を通して生き抜いてきた、一人の機械工の職業的生涯のスケッチである。これはいまから二年前、電機労連調査部が中高年対策の基礎資料とするため、労働科学研究所とともに実施した「加齢にともなう労働能力の変化と仕事」という調査の際の聞き取りの一部を整理したものである。

この調査では、電機労連傘下の組合の四〇歳以上の現役労働者六五名から、職業的キャリアを聞く機会を得た。そのなかの一人、当時、明電舎沼津工場に在籍中の一人の労働者からの聞き取りを選んで掲載する。

五〇年の職業的生涯を語る畠山さんの仕事を語る目は輝き、誇りに満ちていた。彼が語ったような、労働の歴史は、血人ひとりの労働者もまた誇りとともに持っている。しかし、おそらく、語る機会も、

それが活字となって残されることも少ないだろう。こういう歴史は、いったい、歴史のどういう分野に記録されて、伝えられるのだろうか。

明電舎計設労働者・畠山さん物語

小樽の町工場で六尺旋盤

畠山さんは、大正十一年四月生まれ、小学校を出て、昭和一二年、北海道・小樽の小さな機械工場から、労働者としての生涯をはじめた。

最初は、小僧で入るんです。旋盤なんてすぐ使わせてくれませんよ。雑役ですね。杜長のうちの大掃除を手伝うとか、当時、博覧会があつて、その会場づくりとか。それに、工具類の貸し出しの手伝い。一年一〇カ月くらいして、機械に触らせてくれたかな。それでも早い方だったんです。ちょうど戦争になつたんで。

最初の機械は、六尺旋盤でした。となりに先輩がついてくれましたが、訓練なんてないですよ。荒削りからはじめるんです。むかしは、刃物のつくりからみんな一人でやりました。それまで見てますから、操作は、二、三カ月でわかるが、削りや送りのスピードとか、どういふ刃物を使ったらいいか、こつやつてやるんだよ、と兄弟子が教えてくれて、おかしくなると、こちらから聞きにいきました。

同じものばかりでなく、いろんなものを削る。バイトの加工も、むかしはしづくりから全部やりました。

しづくり——荒砥、焼入れ、仕上げ、これは一年ぐらいたったら教えてくれます。みんなそうだった。

ところが、昭和一二年（注〓昭和一二年七月七日、日支事変がはじまる）ころになると、戦争がたけなわになるでしょう。それをやっている機械が止まるから専門の人をおくようになつた。そして、荒砥ぎしたやつをくれるようになりました。

仕上げには、いろいろ流儀があるんですよ。刃物に流儀がある。角度を何度にしたらいいか、しゃくりのRをどうしたらいいか、みんな自分で研究する。昼休みなんか、一人前の職人の機械を見て歩くんです。

昭和一七年（注〓太平洋戦争のはじまった翌年）に兵隊検査を受けて、一八年の一月一〇日に入隊しました。

兵隊にいく前に六年ぐらい旋盤をやっていたんですが、一人前というと、やはり、兵隊検査を受けて一人前といわれるんです。ちょっと記念品の小さなものをくれて、お祝いの式をしてくれる。

一人前の腕をもつために

腕の方は、一人前に出来るようになるのは、そう、四年位でしょうか。このときまでに刃物の作り方など覚えてしまいます。同僚とは競争です。仕上げバイトなどは、秘密で教えない、

ちゃんと布でくるんでおくんです。それで、どうしてもわからないところは、あの人は腕がいいといわれる先輩のところに聞きに行くんです。むかしは、職人は、ほうぼうの工場を流れ歩いていました。だから、腕のいい人の名前は、なりひびいてくる。そういう人の作った品物を見て、すごいなあと思うと、その人に聞きに行く。なかなか教えてくれないんですね。

「今晚、一升持ってうちへこい」というです。

どんなことでも一升です。大きいことでも小さいことでも、一升持って、そのうちへ行く。聞いてみると、なあんだ、と思うような簡単なことなんです。しかし、自分でいくらやってもわからなかった。どうして、あんなにきれいにできるんだらうと。

例えば、きれいに仕上げる方法でヘールバイト。バネのついたバイトがありました。この厚みとか、バネの強さはどうやったらいいか。

ヘールバイトは、刃先がロウ付けになっている。これが、外国製なんです。当時は、日本製じゃダメだった。

だから、自分でロウ付けする。ヘールを自分で鑄造する、針金でしばって、直つ赤になったところをくつつけ、形のくずれたのをなおす。なかなかうまくいかないんです。そういうことを、どうしたらいいかと聞いたら、こういうんです。「同じようなもの何本もつくってみる、こうしたらいいと思うものを何本もつくって仕上げてみて、そのうちから、使ってみて、これはと思う一番いいやつをみつけるんだ。コレガタネだ」と。

いいのが出采たら、油砥石で砥いで、人にみられないようにくるんでしまっておく。まあ、こういうわけなんです。

闇の三郎の話

こわくてね。当時、職人のなかには、やくざっぽいのも多かったでしょう。

闇の三郎とかいわれる人がいましてね、腕が減法いいというので、仲間うちでも、その名は鳴りひびいていましたよ。そういう人ときあつたのは、なにしろ、こちらは一五歳かこちらですから。

だけど、かわいがってくれましてね。わたしのとこの先輩なんかも、作業中、昼近くなって一時半ごろになると「お前、大福買ってこい」なんていわれて、大福餅を買ってくると、二つぐらくれられたりしました。いまみたいに、上から教わるんでなくて競争ですよ。どうやったら、早く、きれいに仕上がるか。

一人前になると給料は倍に

むかしは、一人前になると給料はよかったですよ。小僧というのは、仕事を覚えるのだから、授業料出してもいいっていうようなことだったから。

兵隊検査を受けて、一人前になると、ぼつと給料が上がる。それまでの二倍まではいかなか

つたかもしれませんが。

兵隊からもどつて

昭和一八年に兵隊にいき、写真の特別訓練を受けて、鉄道の偵察写真の教育を受けました。針金のついた大きい写真機ね、新聞記者なんかもつていた。陸軍の鉄道隊でしたから。敗戦で、中国から帰ってきたのが、昭和二年の六月です。もとのところにもどつたんです。

工場は、戦時中大砲の弾丸の外側とか填管とかをやっていたんですが、帰ってきた当座は、ゲージ作りの仕事をやらされました。やはり、旋盤で、ねじゲージ作りをする仕事です。工具を使ったりもしました。まあ、兵隊にいく前に、腕は一応たしかになっていたんで、ちつともむずかしいことはありませんでした。

ところが、その頃、会社をやめた人がいましてね。なんか、ブローカーみたいなことをやっているのですが、この人から、将来、工場を作りたいから来ないかとさそわれました。給料は、五割増にするというんです。で、そこへ移ったわけです。

同じ、北海道で、建設機械、起重機とかジャッキとか、注文をとつてきて、よその工場にやらせるそのうち、機械を東京へ買いに行ったりして、工場をつくりました。三年位かかりました。その間は、機械作はやりませんでした。

昭和二六年（注Ⅱ朝鮮戦争の始まった翌年）に工場ができて、また、旋盤をやりはじめまし

た。そこに六年位いたことになりますか。昭和二八年までいました。はじめは、うまいこと言って働かせたんですね。それに、やっぱり、切れる人だった。人をだますっていうか、前に営業をやっていた人ですが、そういうことうまいんです。ぼくらみたいな職人にはダメですね。

もとの工場は、戦時中、軍需工場だったでしょう。敗戦になったとき、全部カネを払ったらしいですね。そのとき、社長の命令で、その人は、東京へカネを受け取りにいったんです。リユックを背負って。

ところが、青函連絡船になかなか乗れなかった。そこで、お札の一杯入ったリユックの中のカネの一部を使って、漁船を借りて、はこんでいった。社長は、とてもよろこんだらしい。もつとも、おカネのほうは、その人にいくらもくれなかつたらしい。ちつとしかくれなかつたらしいよ。

実はね、そのとき、この人は、自分のうちに寄って一部をおいてきた。そのお金で、会社をやめて、この仕事を始めたというわけです。あのころは、ドサクサでしたからね。

新しい会社は、うまくいったんですが、ぼくはおもしろくなくてやめてさ、こつち（東京）にきたんです。こつちにも、ぼくらの同僚がきているし、同僚の一人のいるところへ落ち着きました。

ドサクサのインチキ会社

ところが、これが、インチキ会社でしてね。

ぼくは、ここでは、十二尺旋盤で大ものを削りました。タンクのフランジとかね。フランジのミゾを削ったり、フランジの面の仕上げとか、まわりの穴あけとかですな。

このインチキ会社は、勤めて一年ぐらいでつぶれた。そこは、自分のところで材料を仕入れて、やすく売らんだけのもの。はじめは、カネを払って仕入れるが、後は、品物を作らないで売っちゃう。買う人をキャバレーにつれていって、飲ましたり食わしたりして、買わして売っただけ自分のものにして、つぶれちゃった。

つぶれたときすごいね。機械やさんとか、みんながわあつとやってきて、機械をはずしてもつぶってしまうんですね。これは、おれの権利だといって。そのとき、自分ら職人の私物までもってかれちゃった。職人というのは、自分の工具をもっているんです。モンキーとかスパナとか、測定器とか一式を持っている。それも一番いいのを持っているんですね。やすいんじゃなくて、外国製のいいのを持っている、これをみんな、もってかれちゃった。

刑事訴訟法で訴えたんだけど、あまり相手にしてくれないですね。ああいうのはね。びっくりしましたね。東京へ出てきて、こんなことがあって。とにかく、次の朝、仕事場へ行ってみたら、工場はガラランドウでなにもない。ひどいもんですよ。

「受取り仕事」でもうける

そこで、今度は、横浜の工場につとめました。昭和二九年です。横浜は、造船関係の工場で、やっぱり小さいところでしたが、「受取り仕事」があつてね。シャフト一本削ると五千円なら五千円という仕事なんです。まあ、会社は一万円ぐらいで請けるんだと思いますが、職人には五千円ということですよ。ここは、ちょっとカネになりました。普通二〇万円もらうところ、ここでは四〇万円とかね。そういう仕事は、腕次第です。

もちろん、職人によつて、個人差が出ます。そのとき、いままで教えた腕が生きてくるんです。刃の作り方とか、おくりの速度とか仕上がりがきれいとか、ね。

回転数をいくらにしたら一番効果的とか。

おくりが早すぎると、バイトはすぐだめになるんです。はじめ、ちょっと削ってみて判断する。カンですね。当時でも、『旋盤教本』なんかはあつたけど、回転数だの表面速度何フィートだのいちいち計算してやつてるようじゃ商売にならない。

ここは、三年ぐらいいました。あのころ、鍋底景気というのがありましたでしょう。小さいところで、十何人ぐらいいしかない。親工場というか、仕事を出してくれるところは、大きな製鉄所でしたが、そこがつぶれてしまいましたね。こつちも仕事がなくなつて、遊びましたよ。昭和三〇年ごろですね。

このころは、結婚して、女房も子供もいました。

まあ、それまで働いて、かせいでいたから、しばらく遊んでいました。もつとも、ちよこはよこは仕事もしましたが。というのは、職人仲間が、ほうぼうにいる。あちこちに、仕事があるってんで、ちよつといつて仕事することもありました。おかしなところでしたよ。

地域の組合の役員に

ちようど、そのころ、組合の地区労の役員になったんです。合同労組というのを東京の大田区につくりましてね。ちよちやいところばかり集まってつくりました。大田の合同労組の役員やって、そこから、地区労の執行委員ですか。お前、あれやれつていわれまして。タンクの仕事やったとき、ほら、まえにつぶれたことがあるでしょ。未払いのカネをとるため、プラブラしてたとき、だいぶ活躍したわけ。

法律のことを勉強したりしてね。川崎の東大の先生なんか、よくおそわりにいきました。未払いの下請け代金が、旦那にあったのをおさえて、何百万円かとってきて、みんなにくばりました。三〇人ぐらいいたかな。当時は、中小企業でつぶれたとか、賃金を払わないとか、そういう問題が、あちこちにありました。

青森から出てきて、工場につとめたんだけど、宿舍で、ちよつとも自由がないなんていうところもあって、その会社に交渉にいったりもしました。

また、残業があるのはふつうでしたが、割増率をくれないとかね。残業の割増率は、労働基準法でもきまってるでしょ。それを払ってないところがあつて交渉にいったこともあります。

それからね、やっぱり仲間の世話で、四〇人ぐらいいる工場を紹介されてね。組合を通じて、そういう話があつたんです。やっぱり、大田区で、羽田の方にあつた工場です。昭和三〇年ごろですね。入ったときは、旋盤をやりました。そこは、国鉄の電車の軸受をやつたところですよ。電車の車輪のそこについてる、ベアリングが入っている鑄鋼です。輸出もブラジルとか、アルゼンチンとかありましたが、ほとんど国鉄の仕事が主でした。

検査が終わつて、納めるのに、浜松町の海岸寄りのところへ、トラックで納めにいくんです。そこも「受け取り」ですね。ずいぶん働きましたよ。単価もよかつた。腕に自信があれば、受け取り仕事の方がいいんです。その工場は全部、受け取りでした。国鉄の仕事は、ものさえしつかりつくれば、単価はいいですね。

研磨の仕事にかわる

そのうち、仕上げ、内面研磨をやる人が大部不良を出しましね、いらなくなつて、やめたんです。

やつてくれないかと、ぼくのところへきました。ぼくは旋盤だったけど、じゃやりましょうと引き受けたんです。研磨は、このときはじめてです。勉強しましたね。研磨のほうが、単価

はい。ふつう二〇万円とるところ、六〇万円ぐらいもらったんですよ。研磨は、旋盤みたいに、ガッツと力入れてはさむということないでしょう。かるーく、ひずみが出ないようにおさえて、そのうち研磨機にもだいたい慣れました。

あくりとかなんとかは、旋盤で鍛えた腕とカンが役に立ちました。

砥石も自分で選定しました。ノリタケの何番とか。

工具屋がくると何番のをくれつてね。すぐ覚えますよ。職人だったら、同じまわる機械ですからね。

研磨が旋盤とちがうところといえば、そう研磨はしよちゅう水かけるしね、砥石のスピードと品物の回転との関係です。同じカンですよ。

けずりとするのは、コンマ台。コンマ一ぐらいかな。やってるうちに、輸出ものがきましてね。いままでの内面研磨は、突き抜けだったが、今度のは、そうじゃないんです。むこうに壁があるやつ。どうするかつてんで、事務所の設計屋さんが考えとかいったんだけど、何か月先にくるとい。機械の機構を変えないとできないんです。アタツチメントをつけて、途中でとまるようにしないといけない。ところが、その工作機械の方が、いつまでたつても来ないんです。こまつちゃつてね。

そんなだったら、おれがやるよ、といつてね。ぼくが、自転車屋へいって、部品なんか買ってきて、改造してしまった。社長はえらくよろこんじゃった。カネはくれなかつたけど。ふつ

うだったら報償金をくれますね。それで、通してない研磨をやりました。

社長は、朝鮮の人でした。いい人でしたがね。女遊びしたりして派手なんだな。金になるから。そのかわり、料亭へつれてつてくれたり、うまいものを食わしたりしてくれました。あの人には、世話になったと、いまでも思ってるね。仕事すれば、ふつうの三倍ももらった。

ところが、あのころ、国会の予算がきまらなくてのびちゃうことがあった。予算がのびると仕事がないんです。最低保障というのがあったのですが、これがやすい。いままで六〇万円ぐらいもらってたのが、一〇万ぐらいになってしまった。そのうち、こんどは会社がおかしくなった。予算がきまらないんで仕事がないから。

朝鮮の人っておもしろいね。仲間が、その工場を守りにくるんです。あぶないと思う債権者はみんな持っていかれちゃうでしょ。でもね、黒い眼鏡をかけた、スゴイ奴が事務所に来ているんです。「何でもないよ」で社長はいうんですが、ちよつと気持ちが変わるんですよ。会社がおかしくなって、そのときは、会社は休み。渡り職人やってたら、なが続きしないしね。いい時は、いいんだけど。

ほくら、ふつうの人の一二倍働いたから、六〇万位働いた。いまでいう六〇万円ぐらい。もつと働いた人は八〇万ぐらいとっていた。仲間どうしだから、わかるんです。会社が休みで、家庭待機ということでした。

明電舎に入る

しょうがないか軍隊時代の陸軍の鉄道隊にいたころの手づるで、明電舎に入りました。電機産業は景気がいいっていうので。明電舎に入ったのは、昭和三四年。工場は、品川でした。この工場では遮断機、制御器、配電盤なんかをつくっていました。大企業につとめたのは、このときがはじめてです。

明電舎で、ぼくは、ラジアルボール盤を使って、大型の遮断機の部品の加工をやることになりました。

旋盤をやっていたので、ボール盤は、なんでもないですね。旋盤だって、ドリルを使うし、ドリルの砥き方なんかもわかってました。大きい工場でしょう。毎朝、ドリルをとりかえてくれるんです。

自分でドリルを砥ぐことはない。昭和三六年、沼津工場ができて、先発で来ました。こっちはきてからも、新しい機械で、ラジアルボール盤をやっていました。

その後、上の方から、小さいボール盤をやってくれといわれて、二年位やりました。

そのころ、組合の支部委員をやりました。ちょうど明電舎が、重宗体制から住友体制に変わるときでした。人は一切採用しないってことでね、配電盤の方の人が少なくなつて、昭和四〇年ごろ、配電盤の方にいかないかといわれて、配電盤の設計に移りました。やっぱり機械

を離れるのは、ちょっと未練がありましたね。でも新しい飛躍も必要だなと思ひまして。

設計部門にかわる

図面は、前から見ていたし、見るのは得意でしたが、たまたま、沼津へ来てから、技能検定がありまして、かなりいい成績をとったんです。そんなことを会社はみていたのかなと思ひます。工業高校卒業程度の資格をとっていましたから。

電流をとる回路、あの銅柱です。あれ専門です。どのくらいの電流が流れているから、どのくらいのサイズにしてというどうまげて、というやつ。デスバーの設計です。この図面を引く。低圧から三万ボルトまであります。

キャビネットの設計はすんで、一番最後のところです。変圧器がついているとき、二次電流が何アンペアになるとか。短絡したときこわれないように、間隔をどのくらいにするとか計算するわけですね。

もう、この仕事十何年になります。こういう専門の人は、あまりいないんです。あとつぐような人もあまりないね。だから、ほくみたいのが、年とつてもいれるわけです。ふつう五五歳こえると、どっかへとばされちゃう。

下請けから、采ないかって呼びにきたんだけどね。ダメだつて会社の方からことわられたと下請けの社長がいました。ぼくら、機械場からうつらなかつたら、とつくに、どこかへい

っているでしょうね。ぼくも、老眼鏡かけて、図面を引いてますが、この間、一度だけ病氣しました。機械場から設計へ移ったときですね。バセドウ病をやりました。

青山の伊藤病院に半年くらい通いました。そのときは、五九キロまでやせました。休まなかつたけどね。でも、肉をとるだけの余裕があったからもったんだと思います。

まあ、自分でも一生懸命働いてきました。機械から設計に変わったときは、からだに無理があつたんでしょうね。電気の方はうとかつたから、勉強しました。みんな独学ですよ。いまになって、考えると、機械を離れたことも、結果的にはよかつた。

いまは、健康で、自転車で一〇分位で通っています。お酒ですか。毎晩、コップ一杯位ですね。二人の息子も働いています。

畠山さんは、昨年四月に明電舎を退職された。しかし、いまも自宅で仕事と取り組んでいる。
× ×
体の弱い奥さんの面倒をみるためである。

(一九八三年七月)